

編集後記

編集長(ダン シロウ)

第42号も順調です。新規連載がまた三本。ギョッとするタイトルのものもありますが、対人援助領域の奥深さと多面性を表していると思います。

前号から今号に至る間、私自身が様々な対人援助領域に働く人達のお世話になることになりました。医師、看護師、ソーシャルワーカー、病棟業務従事者、薬剤師、救急隊員、葬祭業者、僧侶、火葬場職員など。それぞれの場にあるプロフェッショナルのディテールに触れる思いでした。

「誰が担当しても、中身はおおむね変わらない」という専門技術はあると思います。担当者によって、中味が違いすぎるのは問題です。そういう意味で、「どこでも同じサービスが受けられます！」は正しいと思います。

その上で、サービスを提供する姿勢とか言葉とか、身のこなしに、思いがけないメッセージが届いてしまうのだと思います。

私は時の勢いで、時々言葉が暴走するところがあるので、結果的に相手が傷ついていることがあるようです。言い訳すれば出来るのですが、そう受け取られた事実は誤解だろうと現実です。

そんなことを起こすのは目的ではないので、心がけたいと、自分が援助を受ける立場で接していると、あらためて思いました。

そんなわけで、様々な分野における実践中心の連載者諸氏の記述に、まだまだ学ばねばなあと思わされるものがたくさんある最近です。

編集員(チバ アキオ)

私の住んでいる京都衣笠周辺には、地層が露出している道路の壁面がある。きぬかけの道にあるその場所は近隣の児童が授業で地層について習う時に必ず訪れて学んでいる。地層といえば、少し前に話題になった「チバニアン」は全国の千葉姓は思わず耳を傾けたらう。チバニアンのすごさは地球の地磁気

逆転、つまりN極とS極の逆転を繰り返した歴史の中で、そのもっとも最近の地層があることらしい(多分)。なぜ、その逆転の繰り返しがわかるかということ、同じ場所にある玄武岩に含まれる鉄分が、時代によって寄っている方向(その岩にコンパスを近づけるとNを指す方向)が逆になることからわかったという。その繰り返しによって、地磁気が今と同じ時期、逆転の時期がわかってきたそうだ。今を生きる私たちにとっての興味は、この地磁気逆転(ポールシフト)がいつ起こるのか?その時にどうなるのか?である(これをテーマにした映画もあった)。地磁気逆転時期の地球への影響は逆転時期の動植物の状況を紐解くことでわかるそうである。幸い自然レベルでは大きな影響がないといわれ、一方電気系統のテクノロジーでは影響が大きいこともいわれている。

マガジンも地層である。その地層、つまり各号に含まれる内容の方向性も、その時々で変わってくる。その変化の時期に社会で何があったか?は何百万年前ではないのでわかる。こうした地層にも似たマガジンの歩みは未来推測するとき、未来を作り出すときに大いに役立つことは間違いない。その編集部に「チバ」という名前の編集員がいるのはただの偶然です。

編集員(オオタニ タカシ)

依然として新型コロナの影響が続く世の中ですが、対人援助学マガジン 42号は変わらず予定通りの発行です。無料 Web マガジンで、原稿集めから発行までオンラインであるためコロナの影響が少なかったという面がもちろん大きいですが、一方でコロナ禍においても対人援助の営みが途絶えることがないという現れでもあります。

様々な事情を抱えながら、人が生き、暮らしていく限り、対人援助の営みは続くのです。

今号の編集会議は、久しぶりの対面実施でした。オンライン会議でも遜色ないようにも思っていたのですが、対面の良さを改めて実感します。話の間合い、息づかい、同じ場と時間を共有しているという感覚。そのようなものを感じられることが、やはり自分は好きなのかなと思いました。思ってもいないようなことをこの場をやり過ごすために口にしたりはしないとお互いが理解している状況で、言葉を交わし、話題がつなが

り、広がり、思考を紡いでいく時間が、とても心地よく、自分の力を与えてくれるように感じました。

仕事も、病も、思いがけない事態も、すべて人が生きていく過程の一部です。よりよい生を望むとするならば、適度に妥協したり、忖度したり、責任回避したりするのではなく、自分なりに考えて判断し、結果を引き受けながら、ひとつひとつ選び取っていくしかないのだと、改めて思いました。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻42号

第11巻 第2号

2020年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

**第43号は2020年12月15日
発刊の予定です。
原稿締切2020年11月25日！**

執筆者募集

11年目を迎えたマガジン。常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌です。必要な回数を、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしていま

す。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

タイタニック号の救命ボートの底に穴が空いていた、それだけのことを大きなB全ボードに描いた。40年ほど前の事だ。その一部をトリミングして表紙絵に使った。

タイタニック号遭難の話は大ヒット映画になる前から大好きな話だった。そしてあの映画の撮影真っ只中の時期に、NYを訪れていた。

金がかかりすぎて製作会社が傾くとか、監督が自分のギャラを供出するとか、いろいろゴシップ新聞ネタになっていた。沈没当時の新聞の復刻版がお土産に販売されていた。まさかあんな空前の大ヒット作になるとは、制作会社も配給会社も想像できていなかった。

私達はいつも、結果が出るまで何も分かっていない。そのくせ、結果が現れたとたん、自分は分かっていたなどと言いたがる。

だからと言うわけでもないが、まだ結果が見えない時期の不安や期待の渦中にある時、この時間を後でどんな風に語る事になるのだろうと思ってワクワクすることがある。

子育ては基本的にこの繰り返しだった気がする。

(2020/09/15)